

# 英語教育についての一考察

## ——字義通りの語句解釈——

波多野 満 雄

### はじめに

高校、さらに大学の一般教養の英語教育では、「これでこういう意味になる」、「こういう形式に決まっている」など、理由が説明されることなく、ただ、そういうものとして丸暗記するよう指導される事項が多くある。例えば、例 (1a) の there 構文、例 (1b) の感嘆文、例 (1c) の tough 構文の場合、何のためにこのような構文を取るのか（つまり、その機能）、更に何故そのような機能が生ずるのか（つまり、その機能発生のプロセス）などについては説明されないのが普通である。高校レベルあるいは大学の一般教養レベルの文法では説明のつかないものも少なからずあるので、ある程度は仕方のないことである<sup>(1)</sup>。しかし、ある項目の中核的知識であるにも関わらず、説明すると情報量が多くなりすぎるとか、時間がかかるとかといった理由で説明がなされないものについては、より高いレベルを目指す場合、その説明を飛ばさず学ぶこと、考えることが必要になってくる。この途中の説明、つまり機能発生のプロセスが英語のネイティブスピーカーの持つ感覚と密接に結びついているからである。更に、下記の例 (2)・(3) について見てみよう。例 (2a) の make up for ～は「～を補う、～の埋め合せをする」の意味を持った句動詞として、例 (2b) の have to は「～しなければならない」の意味を持った慣用句として説明がなされる傾向がある。また、be going to の場合は、例 (3a) のように「～するつもりである」、または例 (3b) のように「～しそうだ」の意味を持った慣用句である、とやはり定型化した説明がなされる傾向がある。つまり、いずれもこれらの意味が発生するプロセス説明がないのである。これらを定型化してしまうことで、やはりネイティブスピーカーが感じている感覚を伝えられないということが生ずる。また、それ故に、例えば例 (3) の be going to のように、ある句に複数の意味がある場合など、それぞれの意味の説明自体は事実であるが、結局それらは派生的な現象を述べているだけなので、その複数の説明が一体化されず、根本的な理解に繋がらない場合が多くなる。例 (1) の構文の説明の場合と違い、例 (2)・(3) の場合は複数の語句が結合して一つの意味を成すものであり、意味派生のプロセス説明が

可能と思われるものである。ある句の意味・用法を考察する場合、その句の最終的に熟語化・慣用化した意味や用法のみ考察してもその句の本質には迫ることは出来ず、その句の字義通りの意味から考えた方がその根本的な意味や特性を説明することが可能な場合が多い。本稿の目的は複数の語句が結合して一つの意味をなす表現を分析し、如何にすればそれらの根本的な理解に繋がるかを考察することである。次章では、まず分析のプロセスが理解しやすい句動詞の場合から見てゆく。

- (1) a. There are many such places in the UK. (BNC<sup>(2)</sup>)  
(英国にはこのような場所がたくさんある)
- b. How beautiful it was, this young face! (BNC)  
(何と美しかったことか、この若かった頃の顔は)
- c. This question is impossible to answer. (BNC)  
(この問題は解答不可能だ)
- (2) a. But don't worry, I'll make up for it when I get you home. (BNC)  
(でも心配しないで、家まで君を送ったらその埋め合わせはするから)
- b. 'I have to move out soon,' she said quickly. (BNC)  
(「私はすぐに立ち退かなければならないのです」と彼女は早口で言った)
- (3) a. I am going to leave this job. (BNC)  
(私はこの仕事をやめるつもりです)
- b. It's going to rain. (BNC)  
(雨が降りそうです)

## 1. 句動詞

英語には動詞を含んだ複数の語が一体となって一つの意味を表す表現があり、句動詞と呼ばれている。高校までは教科書に出た端から丸暗記するよう指導される傾向がある。これらの表現を英語のネイティブスピーカーも丸暗記しているのであろうか。一部はそうかもしれない。しかし、英語に何千、何万も存在する動詞に不変化詞と呼ばれる語 (on, off, in, out, up, down, away など) を付加すれば句動詞となるのであり、それらが元の語句の意味から遊離していたとしたら、それらすべて、いや半分でも覚えることは不可能であろう。ではどうしているのか。句動詞の多くは個々の語の意味を合わせたものと全体の意味とが結びついているのであり、ネイティブスピーカーは、各語の元の意味を意識しているのである。日本語の場合を考えてみるとその辺の状況が分かると思

う。例えば例 (4a) の「押し付ける」は、広辞苑では「仕事や責任を無理に引き受けさせる」と説明している。日本語のネイティブスピーカーは、最終的には広辞苑の表す意味のように解釈するだろうが、その前段階でこの「押し付ける」を「押す」と「付ける」の合体したものと捉えるのであり、荷物のような物を相手の方に押しやって相手の体にくっつけるという動作のイメージを思い浮かべると考えられる。例 (4b) の場合も同様であり、「引き摺り下ろす」は広辞苑では「上位の者を、無理にその地位から下ろす」と説明しているが、最終的な解釈の前段階で「引く」「摺る」「下ろす」の合体したものと捉え、嫌がって抵抗し、動こうとしない相手を無理やり引っ張り、床を摺るように移動させ、ある場所から下ろすという動作のイメージを思い浮かべるであろう。

(4) a. 彼女は P T A の役員を押し付けられた。

b. 社長の座から引き摺り下ろす。

同様なことが当然英語でも行われていると考えられる。例えば例 (5a) の go out with ～は「～とデートする」の意となるが、字義通りの意味である「～と共に外出する」の意からの意味変化であり、例 (5b) の take part in ～は「～に参加する」の意となるが、字義通りは「～においてある役目・分担 (part) を引き受ける」の意であり、例 (6a-c) の make out は「なんとか理解する」の意であるが、字義通りは「(頭の中で何か具体的なもの：考え・イメージ・音など) を作り出す」の意であり、例 (6a) のように知的な理解に止まらず、例 (6b) のようにイメージとしての理解、例 (6c) のように音としての理解の意味も表しうるのである。英語のネイティブスピーカーはこのようなプロセスを経て意味を理解しているため、ほとんどの句動詞は複数語句の字義通りの意味が合わさったものに過ぎなくなり、全体の意味把握も容易になるのである。また前章で挙げた例 (7a) の make up for ～は「～を補う、～の埋め合せをする」の意であるが、make up には他にも様々な句動詞としての意味がある。例 (7b) では「伸直りをする」の意であり、例 (7c) のように make up one's face となれば、「化粧をする」、例 (7d) のように make up one's mind となれば、「決心する」という意になる。最終的な意味内容はそれぞれこの通りになるだろうが、make up の字義通りの意味は「形になっていないものを、ある形として姿を現させ完成させる、作り上げる」の意なのであり、作り上げるものが例 (7a) では「(～のための) 何か良い状況」であり、例 (7b) では「(～との) よい関係」なのである。目的語が既にある例 (7c) では「元の顔から整った顔を作り上げる」の意であり、

例 (7c) の場合は、「どうしてよいか分からず形になっていない気持ちを形にし、定める」の意になるのである。いずれも make up の字義通りの意味から様々な変化形が生まれただけなのである。このような語句の字義通りの意味を経た理解によって、これまで個別の説明で一体化していなかった句動詞の理解を大いに進めることが期待できるのである。以下の章では句動詞と言われるもの以外を対象にした場合でも同様なことが言えることを実証してゆく。

- (5) a. 'I don't very often ask you to do anything for me — and I did lend you my earrings when you went out with that Edward last week.' (BNC)  
(そんなに私、頻繁にお願いをしているわけじゃないでしょ。—それにあなたが先週あのエドワードとデートした時、私のイヤリングを貸してあげたじゃない)
- b. About twenty staff took part in the action. (BNC)  
(およそ 20 名のスタッフがその活動に参加した)
- (6) a. We couldn't make out what was wrong. (BNC)  
(我々は何が悪いのか分からなかった)
- b. He could make out what looked like a girl in the darkness. (BNC)  
(彼は暗闇の中、少女のように見えたものが果たして何だったのか分からなかった)
- c. By the end, she was crying so hard they could hardly make out what she said. (BNC)  
(結局、彼女があまりに大泣きしていたので、彼らは彼女が何を言ったのかほとんど分からなかった)
- (7) a. But don't worry, I'll make up for it when I get you home. (=2a)
- b. But I mean I don't want a fight with I just don't wanna make up with her. (BNC)  
(つまりはね、私は彼女と戦いたいのではなくてね、ただ仲直りしたくないのよ)
- c. Returning to the desk she made up her face, powdering carefully about her eyes. (BNC)  
(机に戻ると、彼女は化粧を始め、両目の周りに注意深くパウダーを付けた)
- d. Marcus seemed to have made up his mind. (BNC)  
(マルカスはどうも心を決めたようだった)

## 2. Have to

高校では、have to は「義務・必要」を表し、must とほぼ同じ意味と教えられる。しかし、実際には両者は形態が異なっている以上、違う意味を表すはずである。例えば主語を you にした場合、must では例 (8a) のように命令調になり、have to では (8b) のように助言調になる。両者のこの違いは否定文にするとより明確になる。例 (9a) のように、must not は「～してはいけない」の意で「禁止」を表すが、例 (9b) のように、don't have to は「～する必要はない」の意で「不必要」を表す。Must と have to が同じ意味ならば、否定文になっても同じ意味になるはずであるが、意味がこのように異なってしまう。これはつまり、元々意味が違う語句ということなのである。この違いに関しては通常、must は「話し手が主語にある行動をする義務を課す」ことを表す一方、have to は「外的な事情から主語が義務を課される」ことを表すと説明される。確かにその通りであり、この違いで例 (8a) と (8b) の違いも説明できる。しかし、何故 have to に「義務・必要」の意味が生ずるのか、また、否定にした場合なぜ両者の間でこのような違いが生じるのか、が説明されることはない。Have to および don't have to をいずれも定型化させてしまっており、説明が別々のものになって一体化していないのである。つまり、この説明だけでは実質上、have to と don't have to では別々の表現となってしまう。この have to に関しても前章で扱った句動詞のように語が複数で構成されているので、あくまでその根本的意味は個々の語の意味が合体したものであり、意味が変化したとしても、その根本的意味をネイティブは感覚として保持していると考えられる。Have to、つまり have to do は、have と to do に分けられる。Have は「持っている」という所有の意であり、to do、つまり to 不定詞は「これから～する」の意である<sup>(3)</sup>。これが一緒になったので、have to の原義は「これから～することを持っている」の意となると思われる。さらに、to 不定詞の表す「(これから) ～すること」という未来志向の意は、例 (10a) の書き換えである例 (10b) において、義務の意を表す助動詞の should が使われることから分かるように、往々にして「(これから) ～すべきこと、しなければならないこと」という義務的な意味を含むことになる。よって、最終的に have to do は「(これから) ～すべきことを持っている」または「(これから) すべきこととして～を持っている」の意、つまり義務の意になるのである。

(8) a. Now you must go. (BNC)

(さあ、もう行きなさい)

- b. And you have to start questioning. (BNC)  
(それではもう尋問を始めないと)
- (9) a. P.S. You must not mention this to my mother. (BNC)  
(追伸 このことは私の母に話さないように)
- b. You don't have to play if you don't want to. (BNC)  
(もしいやならば演奏しなくても構いません)
- (10) a. There was also something else to consider. (BNC)  
(まだ他にも考慮すべきことがあった。)
- b. There was also something else that we should consider.

次に、この have to の原義の意味を否定文に当てはめると、何故 must not と don't have to の意味が違ってくるのかも明瞭になる。Must の場合、一語で「義務」を表すのであり、must not と否定文になっても「義務」の意味は変わらない。例 (11a) で示したように、否定辞 not は must 以下の内容を否定するので「～しない義務」を課すことになる。一方、have to の場合の「義務」はあくまで have と to do の意味の合体したものであり、途中に「(これから) すべきこととして～を持っている」の意を経由しているのである。従って、have to の場合の否定辞 not は、例 (11b) で示したように、「持っている」の意の have を否定することになるので、「(これから) すべきこととして～を持ってはいない」という意になり、そこから「～する義務が無い、～しなくてよい」という「不必要」の意味が生まれるのである。この現象も英語のネイティブスピーカーが have to を完全に定型化し、単なる意味のない記号の合体と見なしているのではなく、複数の語から成る語句はあくまで個々の語の意味を合わせて理解している証拠と言える。

- (11) a. P.S. You must [ not mention ] this to my mother. : not は mention を否定
- b. You do[ n't have ] to play if you don't want to. : not は have を否定

### 3. 完了形

完了形は「have/ had + 過去分詞」の形態で、過去形と違い、過去に起こった出来事が何らかの点で現在（又は過去のある時点）と繋がりがあることを表し、例 (12a-d) のように完了・結果・経験・継続の用法があると高校では教えられる。そして、どの用法になるかは文脈や副詞句 (just, already, before, ever,

never, 期間を表す語句等) によって判明することが多いとされる。確かにこの説明自体は誤りではないが、やはりこの場合も完了形を成り立たせている個々の語が意味を持たず、それぞれがバラバラで一体感が無い説明となっている。例えば、例 (13a) は四つの用法のうち、完了・結果の二つを併せ持つような意味になっており、例 (13b) は完了・結果に経験の用法も併せ持っているように思える。このように複数の用法が当てはまる文があるということは、四つの用法があくまで便宜的な区分であることを表している。また、どの用法になるかは副詞句によって決定する場合が多いと言うことは、裏を返せば、副詞句以外の部分は同じ意味合いを表すということになる。例えば、同じ動詞 live が用いられた文であっても、(14a) の方は期間を表す語句があるので「継続」用法と言い、(14b) の方は before があるので「経験」の用法と言っているのであり、共通の have lived の部分はどちらの用法にもなり得る意味を持っているということになる。これらのことから完了形全体には共通した概念が存在していると考えられる。完了形において一番問題となるのは、この完了形の共通の概念とは何であり、何がネイティブスピーカーに、ある出来事と現在（又は過去のある時点）との繋がりを感じさせるのかということである。それが分かれば、上記の説明も全て一体となり、完了形の根本的な理解に繋がると思われる。この共通した概念を考察するために、また字義通りの意味を頼りに分析を進めてゆく。

- (12) a. I have just cleared away the tea things. (BNC)

(私はちょうど茶器を片づけたところだ)

- b. But I have lost your telephone number. (BNC)

(しかし私はあなたの電話番号をなくしてしまった)

- c. It seems as if they've met before. (BNC)

(どうも彼らは以前に会ったことがあるようだ)

- d. I have lived in the country all my life. (BNC)

(私はこれまでずっと田舎暮らしです)

- (13) a. I have already paid out £100,000 in legal fees. (BNC)

(私は既に弁護士料として 10 万ポンド支払っています)

- b. 'We have already met once and will meet again later this week to discuss detailed tactics,' he said. (BNC)

(「我々は既に顔合わせは済んでいるので、今週また会う時は戦術の詳細について話し合うことになります」と彼は言った)

(14) a. They have lived in the area for hundreds of years. (BNC)

(彼らはこの地域に何百年もの間住み続けている)

b. I would like to travel to Barbados as it would be completely different from where I've lived before. (BNC)

(私はバルバドスへ行ってみたいです。そこは私がこれまで暮らしたことのある所とは全く違うでしょうから)

完了形の形態は「have/ had + 過去分詞」であり、この have にもやはり本来の動詞としての意味である「持っている」という所有の意味が残っていると考えられる。このことは英語史を振り返るとよく分かる。完了形は古英語時代、例 (15) のように「have + 目的語 + 過去分詞」の形であった。Have は「持っている」という意味を持った本動詞であり、その後の要素は目的語と過去分詞の補語であった。従って、例 (15) は「私はその魚を捕えられた状態で持っている」の意となる。(cf. 安藤, 2005 および、中尾ほか, 1990) この意味から、「既に捕えている」という完了の意味と「今その状態を持っている」という現在との繋がりが生まれたと思われる。最終的には両者が合わさった、「あることがなされた後の状態・状況を今現在持っている」という意が完了形の本義と言える。そして用法が分かれたとしても、それぞれ、「(ある事をやり終えた) 結果として、経験として、そして継続的活動としてのある状態・状況を今現在持っている」の意となり、この原義は変わらずに存在すると思われる。従って、完了形は無理に四つの用法のいずれかに分類する必要はなく、原義をどの文にもあてはめることで完了形の根本的理解が可能になると思われる。

(15) ic habbe pone fisc gefangenne. (= I have the fish caught.)

この have の「ある状態を持っている」という意味は完了形以外の構文にも感じられる。それは「have + 目的語 + 形容詞／場所・方向の副詞句／doing」となる構文である。この構文は辞書や参考書によって、そのいくつかがまとめられて説明されたり、ばらばらで説明されたりしており、統一されていない。しかし、これらの構文も所有の意味を持つ have を用いて完了形と同じように考えることで類似のものとしてみなすことが出来ると思われる。これらのいずれもがその根底に「～(目的語)が・・・である／・・・するという状況を持つ」という意味を持っていると考えられるのである。例えば、例 (16a) は最後の部分が形容詞であり、「家がきれいに片付いている状態」を持つ意である。



例 (16b) は場所・方向の副詞句で、「彼女が会社から、人生から居なくなる状態」を持つ意であり、例 (16c) は現在分詞 doing が用いられ、「彼が横になっている」状態を持つ意である。

- (16) a. She would ask Sam to look after his brothers and sisters, and have the house clean and tidy on her return. (BNC)

(彼女はサムに兄弟姉妹の面倒を頼み、帰宅後は家をきれいに片付けるのが常だった)

- b. He wanted to be rid of her, to have her out of the office and out of his life, and that was what she wanted too, wasn't it? (BNC)

(彼は彼女から逃れたかった。会社から、自分の人生から彼女を追い出したかった。それは彼女も望んでいたことではないだろうか)

- c. I can't have him lying there, I've got a restaurant kitchen through that door. (BNC)

(そんな所で彼を横にさせて置くわけにはいかないのよ。そのドアを通してレストランの厨房に行くんだから)

同じことが使役動詞として have が用いられた場合にも言える。形態としては「have + 目的語 + 動詞の原形／過去分詞」となるが、いずれも「～(目的語)が・・・する／・・・されるという状態・状況を持つ」という意味を持っていると考えられるのである。例えば、例 (17a) では「自動車工がチェックするという状況」を持ち、例 (17b) では「髪が切られた状態・状況」を持ち、例 (17c) では「足が折られた状態・状況」を持つことになる。同じ使役動詞の make が、本来の「作り出す」という、状況を生じさせることに積極的な意味の影響で、例 (18) のように「(強制的に・力づくで) ある状況を作り出す」のに対し、この have 使役は状況を生じさせることに関しては中立的である。例えば、例 (17b) では have に強勢が置かれ、主語の意志を感じさせ、積極的にある状況を生じさせることと表すのに対して、例 (17c) では broken に強勢が置かれ、主語の意志の無い、受動的な意味、つまり被害としての状況受容を表している。このように能動的・受動的両方の意味を表しうるのも、have の単に「ある状態・状況を持つ」という中立的な意味の為と考えられる。

- (17) a. 'You'd better have a mechanic check it over before you try and drive it.' (BNC)

(試しに乗ってみる前に自動車工に点検してもらったほうがいいよ)

b. How often do you have your hair cut? (BNC)

(どのくらいの間隔で髪を切ってもらいますか)

c. But his estranged wife Christine, 39, was knocked out and had a leg broken. (BNC)

(しかし、彼の別居中の妻クリスティン、39歳、は打たれて気を失い、片足を折られた)

(18) Not a good actor, but Charles made him play himself and it worked. (BNC)

(すごい役者ではなかったが、チャールズは彼を一人で演じさせた。すると、うまくいった)

以上、have が用いられた構文を見てきたが、いずれも have の所有の意味を物の所有から状態・状況の所有にすることで、完了形を含めて同類のものと見なすことで出来るのである。

#### 4. Be going to

Be going to は「意志」(根源的用法)や「予測・推量」(認識的用法)を表し、助動詞 will とほぼ同じ意味を持つと高校では教えられる。前述の must と have to の関係と似ていると言える。ただし、be going to の場合、will の持つ根源的用法・認識的用法それぞれに対応した意味を持つので意味は複数あることになる。Will および be going to の持つ意味の相違はあらまし以下のようにまとめられる。

- ・ Will は①意志(根源的用法)の場合、発話時の場面の状況に応じた意志・意図を表し、「(それなら)～する」の意となる。②予測・推量(認識的用法)の場合、確たる根拠や証拠があるわけではない単なる予測を表し、「～だろう」の意となる。
- ・ Be going to は①意志の場合、あらかじめ持っていた意志・意図を表し、「～するつもりである」の意となる<sup>(4)</sup>。②予測・推量の場合、何らかの兆し・兆候があり、そこから判断した予測を表し、「～しそうだ」の意となる。

助動詞 will の意味については、本動詞の「願望」の意味から派生したものであるが<sup>(5)</sup>、ここで注目するのは複数語句から成り立つ be going to の方である。通常の英語教育では上記の説明で終わってしまい、何故 be going to にこのような「予測・推量」や「意志」の意味が生ずるのか、また何故 will との相違(あ

らはじめ持っていた意図であったり、兆しや兆候があるなど）を生ずるのかについては説明がなされない。Be going to はここでも一種の記号と化し、個々の語句の意味内容は無視されているのである。これらの問題も字義通りの解釈で理解を進めれば解決すると思われる。

Be going to の場合、形態上は動詞 go の進行形であり、字義通りの意味は「主語が～の方向へ行きつつある」となる。しかし、be going to の go は本来の意味である人や事物の物理的移動を表しているとは言えない。例 (19a-b) のように発話時において述語動詞で表された動作 (leave the job および rain) は行われていないからである。まずはこの go の意味について考えてみる。

(19) a. I am going to leave this job. (=3a)

b. It's going to rain. (=3b)

動詞 go は人や事物の物理的移動が根源の意味であるが、そこから派生した様々な移動の意味を表すことがある。例えば (20a) のように物の状態の移動 (= 変化)、(20b) のように人の精神状態の移動 (= 変化)、そして (20c) のように時の移動 (= 経過) などが挙げられる。

(20) a. Next day at school everything went sour. (BNC)

(翌日学校では全てのことが不愉快になった)

b. I almost went to pieces. (BNC)

(私は心も体もめちゃくちゃになってしまった)

c. As the days went by, his behaviour and thoughts became more and more bizarre. (BNC)

(日が経つにつれて、彼の行動も考えもますます風変わりなものになっていった)

Be going to の場合も同様な意味の派生過程を経ていると思われる。つまり字義通りの意味である「主語が～の方向へ行きつつある」という物理的移動の意味から人の精神状態の移動、状況・状態の移動の意味になったと言える。よって be going to は「主語になっている人の精神状態、つまり気持が～する方向に向かいつつある」こと、または「主語にあたるものが、状況的・状态的に～する方向に向かいつつある」ことを表す用法だと言える。上で述べた be going to の特性と意味である、「あらかじめ持っていた意志・意図」そして「何らかの

兆し・兆候があること」は、全てこの根本的意味から派生したものと言える。「人の気持が～する方向に向かいつつある」ということは、to 不定詞で表している動作をするには至っていないが、それに向かって気持が変化しているということであり、具体的には「～したい」という願望や「～しなければならない」という義務感が強まっていつていることを表していると思われる。この流れから、「(今思いついたのではなく、) あらかじめ持っていた意志・意図」につながって行くのであろうと思われる。例 (21a) では辞職する気持は今発生したものではなく、前々からあり、辞表も書き終わっているかもしれないほど気持が辞職に傾いていることを表しており、例 (21b) では真実を話すには相応しくない状況があるにも関わらず前から持っていた義務感ないしは願望から、話さないのではなく話す方に気持が既に傾いていることを表している。また、「状況・状態が～する方向に向かいつつある」ということは、同じく to 不定詞で表している動作をするには至っていないがそれに向かって状況・状態が変化しているということであり、変化の過程で「何らかの兆し・兆候」が目に見えることになる。例 (22a) では、次に起きることの「兆し・兆候」が相手には分かっている、見えていると話し手は感じていることを表し、例 (22b) では核実験の準備が着々と進んでいる状況が考えられる。

(21) a. I am going to leave this job. (=3a)

b. Nevertheless, I am going to tell you the truth. (BNC)

(それにもかかわらず、私は君に真実を語るつもりです)

(22) a. What do you think is going to happen next? (BNC)

(次に何が起こると思いますか)

b. 'Excuse me, Mr President. Mr President, there is going to be a nuclear test on Tuesday,' he yelled. (BNC)

(「すみません、大統領。火曜に核実験がありそうです」と彼は叫ぶように言った)

また、will は will you ～? の言い回しで語用論的に「依頼」を表しうる一方、be going to の方は表すことが出来ないが、これも両者の違いから説明可能である。例文 (23a) において、please があることから分かるように、この文は依頼を表す文である。頼んだらやってくれる意志があるかを問うているので、「状況・条件に応じた意志」を表す will を用いるのが適切なのである。一方、「あらかじめ持っていた意志」を表す be going to は、主語の気持が既にある方向に進ん

でいることを表すので、発話時に依頼された後の意志を問うことは出来ないのである。例 (23b) においては最後に or not があることから分かるように、あらかじめの意志の有無を問うているだけになる。

(23) a. 'Will you take me home now, please,' she said stiltedly. (BNC)

(「今すぐに私を家に送って行ってくれませんか」と彼女は堅苦しい調子で言った)

b. Are you going to take me home, or not? (BNC)

(私を家に送って行くつもりなの、そうじゃないの?)

以上、be going to の用法について考察してきたが、いずれの用法も be going to の字義通りの意味である「～の方向に行きつつある」を原義とすることで、統一してその意味の発生理由を説明出来ること、また、それぞれの派生的な現象が起こる理由も説明することが可能なことが分かった。

#### おわりに

以上、複数の語句が結合して一つの意味をなす表現を分析し、如何にすればそれらの根本的な理解につながるかを考察してきたが、その結果をまとめると以下ようになる。

- ・ある句の意味・用法を考察する場合、その句の最終的に熟語化・慣用化した意味や用法のみ考察してもその句の本質には迫ることは出来ず、その句の字義通りの意味から考えた方がその根本的な意味や特性を説明することが可能な場合が多い。
- ・句動詞を理解する場合もその句の字義通りの意味を経ることで、その原義を知ることが出来、同一の句が持つ複数の意味の共通性を理解することが出来る。
- ・Have to の原義は「(これから) すべきこととして～を持っている」であり、ここから「義務」意味が生じていること、および、この原義を当てはめることによって、don't have to が「不必要」の意味を持つことになる必然性が明らかになった。
- ・完了形の原義は「あることがなされた後の状態・状況を今現在持っている」であり、四用法のいずれも共通してこの意味を持っていること、および、これと類似の意味は have を用いた、「have + 目的語 + 形容詞／場所・方向の副

詞句／doing」や「have + 目的語 + 動詞の原形／過去分詞」の構文にも見られることが明らかになった。

- ・ Be going to の原義は「主語が～の方向へ行きつつある」であり、この原義を経ることで、be going to の持つ根源的用法も認識的用法も統一してその意味の発生理由を説明出来ること、また、それぞれの派生的な現象が起こる理由も説明出来ることが明らかになった。
- ・ 本稿全体を通して、句はその字義通りの解釈から原義を読み取り、それを句の中核的特性とすることで、その句の本質をつかむことが可能となることが明らかになった。

## NOTE

- (1) There 構文・感嘆文・tough 構文などについてその本質を説明するためには、新情報・旧情報／主題・題述などの情報構造や倒置の機能など英語学の知識を用いる必要がある。
- (2) British National Corpus より採取した例文。本稿の例文の多くが BNC からのものである。BNC とはオックスフォード大学出版局を中心として作成されている現代イギリス英語（口語、文語の両方を含む）のコーパスである。詳細についてはインターネットの以下のアドレスより入手可能。<http://info.ox.ac.uk/bnc>
- (3) To 不定詞の前置詞 to の原義は例 a のように「方向・到達点」であり、物理的な場所・位置関係を表す語である。それが例 b のように時の意味で用いられ、「まだ到達していない時」を表すことになり、さらに例 c のように未来（＝これから先のこと）を意味するようになったと考えられる。
  - a. Then Abbot Radulfus rose and went to the altar.(BNC)  
(その時アボットラデュルスは立ち上がり祭壇へと行った)
  - b. We finished at ten minutes to six, about our usual time(BNC)  
(我々は 6 時 10 分前、だいたいいつもの時間に終えた)
  - c. I hope to go shopping tomorrow.(BNC)  
(私は明日買い物に行けたらと思っています)
- (4) Be going to は例 a のように過去時制で用いられると、結局は実現しなかったことを表すが、同じことが例 b のように intend を過去形に用いた場合にも言える。Intend は目的や計画を既に持っていることを示すので、be going to の根源的用法が intend と同じ振る舞いをするということは、同じく既に意志・意図を持っていることの証となると思われる。なお、認識的用法の場合も例 c のように、状況・事態が既に進んでおり、兆しや兆候として表れていることを表すので、過去時制で用

いられると、結局は実現しなかったことになる。

a. Well, right now I was going to say thank you, but you didn't want that. (BNC)

(えー、今ちょうど私は君にありがとうと言うつもりだったのだが、君はそれを望まなかった)

b. He intended to challenge for a third successive 800 metres title but withdraw last night because of a shin injury. (BNC)

(彼は3度連続の800メートルのタイトルに挑戦するつもりだったが、脛骨の損傷のため昨夜出場を取りやめた)

c. People there thought it was going to rain — but it didn't. (BNC)

(その場にいた人々はもうすぐ雨になりそうだと思ったが、降らなかった)

(5) 助動詞の will は本来本動詞で「～しようと欲する」の意で、「願望・意志」を表していた。

## REFERENCES

Ando, S. (安藤貞雄) 2005. 『現代英文法講義』 東京：開拓社.

Araki, K. (荒木一雄) and Ukaji, M (宇賀治正朋) 1984. 『英語学史Ⅲ A』 英語学体系 10. 東京：大修館書店.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.

Jespersen, O. 1909-49. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. 7vols. Copenhagen: Munksgaard. Heidelberg: Carl Winter. London: George Allen & Unwin.

Nakao, T. (中尾俊夫) 1972. 『英語史Ⅱ』 英語学体系 9. 東京：大修館書店.

Nakao, T. (中尾俊夫) and Koma, O (児馬修) (編) 1990. 『歴史的にさぐる 現代の英文法』 東京：大修館書店.

Oe, S. (大江三郎) 1982. 『動詞 (Ⅰ)』 講座学校英文法の基礎 4. 東京：研究社.

Oe, S. (大江三郎) 1983. 『動詞 (Ⅱ)』 講座学校英文法の基礎 5. 東京：研究社.

Ono, S. (小野茂) and Nakao, T (中尾俊夫) 1980. 『英語史Ⅰ』 英語学体系 8. 東京：大修館書店.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.

\_\_\_\_\_, S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Swan, M. 1980. *Practical English Usage*. London: Oxford University Press.